

目黒寄生虫館月報

昭和36年7月10日発行・毎月1回10日発行

第 29 号

昭和 36 年 7 月

教育映画「寄生虫」の完成

共立映画社企画、三陽映画社製作の学校教材映画「寄生虫」2巻の作製にあたり、当館は協力を求められたので、4月以来これに協力をつづけていたが、いよいよ近く完成する見込みがたった。極めて良心的に製作されているから学童、生徒の学習に役立つものとおもう。

“*Paragonimus miyazakii* Kamo, 1961”のParatypeの保管

今回、鳥取大学医学部加茂甫博士によって発見され新種として発表された *Paragonimus miyazakii* Kamo, 1961 の Paratype No. 12 が、当館に保管を依頼されたので、当館では重要な学術標本として、Type 保管室に保管したので、大方の御利用を待つ。

標本および文献の寄贈 (7.1~7.15)

- 7. 3. 鳥取大学教授加茂甫博士より「On the occurrence of a New Lung Fluke *paragonimus miyazaki* n. sp. in Japan」1篇
- 7. 3. 静岡県衛生部長須川豊博士より「静岡県富士川町において発見された日本住血吸虫」1篇
- 7. 12. 東北大学医学部竹本常松博士より「新しい天然殺蠅成分」1篇
- 7. 15. 鳥取大学医学部教授加茂甫博士より“*Paragonimus miyazakii* Kamo 1961”のパラタイプ。

短 信 (7.1~7.15)

- 7. 5. 目黒区下目黒小学校生徒1行100名。
- 7. 8. 三陽映画社監督カメラマン1行。
- 7. 14. 朝日新聞五反田支局長天井幸三氏来館。

生 物 同 好 会

講師の都合により本月例会は休講。

日本寄生虫学会はじめの三会長 (2)

大阪大学名誉教授

理学博士 吉田 貞雄
医学博士

その後の研究は、指導的立場として学生を指導しつつ、自からもこれに関与せられたものが、

- 6) 1918年—Two New Trematodes of the family Gyrodactylidae with H. Kukuti (紀要39巻)

これは菊池一氏との共著で、これが単殖類最後の業績である。

- 7) 1918年—On *Dissotrema papillatum* u. g. n. sp. / an Amphistomic Parasite from a marine Fish. with Y. Matsudaira. (紀要39巻)

これは松平康良氏の卒業論文で、同氏は不幸にしてこの出版前に急逝したものを、先生が氏の遺稿を訂正し図版をも添え、出版されたので、先生はたとえ学生の論文といえども、自身の論文と同一視し、これを援助し補訂し出版の労をもいとわれなかった。その師弟愛に至っては涙なき能わずである。因に本種属名は既知の *Gyuliauchen* と同一なることを知り、翌年 *Journal of Parasitology* にて訂正せられたのである。

- 8) 1929~1930年—Brief Notes on new Trematodes. I. II. III. with Y. Ozaki. *Japanese Journal of Zoology*. (日本動物学報2—3)

これは7と共に復殖類 (Digenea) に属する吸虫で、先生共著中、最も重要にして、且つ浩瀚なるもので多くの新属新種が公表された名著である。

- 9) 1926年—Some points in the Life History of Hook-worms, with J. Asada.

第3回万国生物学会臨時総会及びブタベストの万国動物学会 (1926年)

ブラッセルの万国国術研究会総会及び万国生物学会総会 (1930年)

我が日本寄生虫学会の如きも、人の知る如く東京会員有志により、その創立が計画せられるや、衆望を負って、創立委員長に就任せられ、いよいよ創立の暁におよび、第一回の会長と仰がれたのも正に当然のことである。その会の閉会に当り、先生はその前年逝去した。吸虫研究の第一人者 Nils Theodor Odhner に就き、寄生虫学界に於ける氏の功績の概要を述べられ、会員一同の起立を求め黙禱を捧げられたことを、私はよく記憶している。当時の会員中には恐らくオドウナーの名さえよく知らない人があったに違いない。にもかかわらず先生がこの拳を敢てせられた心境に、私は先生の寄生虫学研究に熱心であり、同情心の厚きを感じずには居られなかった。

この第一回日本寄生虫学会総会の時、寄生虫の和名統一説が出て、その委員会が設けられ、先生が委員長となられ、在京会員名が委員に任命された。然しこの問題は重要問題であるので、その後、全国会員から更

に 18 名が委嘱され、討議を重ね昭和 8 年第 5 回の学会に於て、一般会員の同意を得て決定したのである。最近、森下薫博士により、その後の問題、将来のため、全国会員中より 17 名の委員を委嘱し、諸問題を審議する計画が提出されている。それにつけ、先生のお人柄については、見る人の認識や着眼点により、いろいろに表現されているが、帰するところは偉大な人であったことになる。或は立派な人格者と概評し、或は誠実の人と言ひ、或は質実剛健と唱え、或は寛厳よろしきを得と称え、或は寡言実行の人と絶賛し、或は信念の人と呼び、或は裏表のない清浄潔白の士と叫び、或は社交家といろいろ善意の讃辞を呈している。これらはいずれも、先生の一面を見た詐らざる表現であつて、これらを総合したものこそ、先生の性格の全貌であることは、先生の一生がこれを物語っている。

一、二の例を見ると、自己又は学生の研究に於ても識見眼界の広い先生が、一度この問題を決められた以上、徹頭徹尾いかなる苦難があつてもこれを排除し、目的を達せねば止ぬほどの熱心、努力、忍耐のあることは、なんの研究に於ても見られるところである。又研究指導上の厳正と強化は、冷酷強情にも似ているが過失をとがめず温情をもって誘導せられるに至つては殆んど別人の感がある。殊に子弟の不運に同情し、その論文の作製、修正、校訂などに至つては、常人の企及し得ないものがある。先生は寡言にして、黙々と仕事にいそまれ、学生を指導せられる半面、休暇とか毎日の昼食時などでは、物静ではあるが、かいきやく口をついで出て一座を哄笑せしむることが少くない。又寡言ではあるが決して無口ではない。応答に対しては、如何なる難問に対しても明晰な判断により、簡単にして十分なる解答を与えられる。先生は決して寡言沈黙の徒でないと同時に、決して饒舌家ではない。

私共少年時代であつた昔、日清戦争のあることも知らずに学問研究をしたと言つて、世間に評判された学者があつたが、わが五島先生は、そんな偏屈な不判屋^{ワカズメ}の学者ではなかつた。一友人の苦境にさえ身を以て同情したほどの人情家であつた。少年時代、京都同志社で同窓であつた一友人が、後年上京し職を求めて苦心しているのを聞き、先生は自分の勤めている学校に同氏を世話し自分の職を譲り、自からは他に職を求められたという涙ぐましい話がある。斯様に人情深い思いやりのある性格の先生であるから、自然に多くの人に信頼され、尊敬され、愛され自から社会的地位を高め

られたが、先生自身は決して世の常の社交界の人となることを潔とせず、隠れた社会人として自得して居られた。

先生が語学に堪能であつたことは、前にも一寸述べたが、この語学の天才を一層助勢した一つの原因は、幼にして洗礼を受け、熱心なるキリスト信者となられ帝大在学中キリスト教青年会を創設したり、或は学外の教会などに出入せられる機会の多きこと、外人との交際接渉が盛んであつたことも、先生の語学を進めた大きな原因であつたと思う。先年ロンドン滞在中、或日、外人との談話を聞いていた隣室の英人が、今話していた人は誰であるかと尋ね、日本人五島氏であると知り、今まで外国人の会話で、あんな上手に話す人に逢つたことがないと激賞した逸話が残っている。又ロックフェラー財団が東大図書館の建設費に数百万円寄贈した時、先生がその図書館建設委員として、ロックフェラー財団の人々を図書館に案内し、詳細に説明された応対振りに、内外の人が驚いたということも聞いている。又理科大学紀要、日本動物学彙報及び日本動物学輯報の編集に当り、主として先生の手を煩わし、先生はこれが為には、時に病を犯してまで熱中せられたのも、全く先生の語学力の抜群であつたことを証して余あると思う。

因に先生の念息茂氏は法経学者で、初め大阪高等商業学校の教授であつた頃は、親しくして頂いていたがその後東京に移られてから、詳しい消息は知らぬが、和歌に堪能で令夫人美代子氏は只今宮中に於て、和歌の御指南役をして居られる。

先生と私

私が初めて、先生にお目にかかつたのは、約半世紀以前のことである。明治 38 年飯島先生から研究のテーマを頂き、条虫の研究を始めたとき、Archiv de Parasitologie を見る必要が起つたが、大学の図書中にこれがないので、紹介状をもって一高を訪ね、五島教授から同誌を拝借したのが、そもその始まりである。当時、寄生虫の参考書や文献は、大学に備え付けてある図書中には、殆んど見あたらず、飯島先生や五島先生の私有図書が大部分であつたので、この点でも両先生のお世話になつたことは多大であつた。その後、大正 1 年に広島高師に於ける任務を果し、再び飯島先生の教室に帰つたときには、すでに五島先生が東大教授として教室に居られたので、特別講義として有志

の学生に講演されたのを、傍聴する機会を得た。それはエビの発生に関する研究で、相当長い間続き、細に入り徹に徹したものであつたことを、今尚お記憶している。その講義振りは確かに先生の性格を現わしていることは、人も許し私も感じたのである。

大正3年大阪に赴任してからは、直接に教を受けることはなかったが、飯島先生と同じく遠く離れていてなにかもお世話になった。殊に飯島先生が亡くなられてからは、専ら先生のみが頼りであった。幸いなことに丁度その頃から、私の古い教え子の尾崎佳正氏が先生の助手として働きながら研究していたので、一層色々とお世話になった。又その頃は御令息が大阪に在職しておられたので、時々来阪せられお逢いする機会も少なかった。斯様に長い間先生の御庇護御援助を受けたことは、数えきれぬ程であるが、就中もっとも嬉しく今尚お感銘していることは、私がイタチの食道に寄生して腫瘍を形成する顎口虫につき、多年研究した結果をまとめて、外国雑誌に寄稿しようと思ったがいずれの雑誌社も、一年以上の後でなければ出版できないという返事であったので困っている際、先生が引き受け、しかも原稿の校閲、添削、訂正等の面倒を見られ、当時先生が主宰して居られた日本動物学輯報に掲載して頂いたのである。

この論文が昭和9年南京で開かれた第9回極東熱帯医学会で、講演した種子本となった。

日本寄生虫学会が設立されてからは、毎年同会に出席すると同時に、少からず先生のお世話になった。昭和10年4月第7回が、大阪で開かれたときにも、わざわざ御出席下され、その懇親会を、先生旧居の近所にある白蘭で開催した時には、特に思い出深い所とお喜びして頂き、先生幼少の頃の昔話を聞くことができ喜んだのも東の間、同年7月に御他界され、その時が最後のお別れであった。嗚呼!! その直後、御令息茂からの御手紙に「父の最後の旅行の折には種々と御厄介をかけ誠にありがたく、殊に父の旧居のほとり土佐堀白蘭にて御会合願えましたこと、危篤の病床にて父のしたためましたものにあらわれて、切なくなる程で御座います。大阪と父との縁のふかさを鋭く感ぜずにはいられません」とありました。如何に先生が、あの貧しい一夕の宴を感慨深く思って下さったかが判り誠に嬉しい極みであった。先生遺骨の一部は、当大阪

の長柄墓地にある御先祖の墓所に埋葬されてある。先生の一周忌には、教室のものと一緒に墓参し、先生の御冥福をお祈りした。(この項了)

ニューオルリズ通信 ④

ニューヨークの印象(2)

大島智夫

近來ますます迫車をかけている早婚。夫婦ともかせぎの傾向は、子供達に両親の権威を失墜させ、テレビの子供達への悪影響、消費力の増大により子供まで自動車を持つ結果、学力の低下、性道徳の低下など思はしからざる影響があり、手に負えぬティーンエイジャーを発生させつつあります。隣に坐つた紳士も、やはり我々はどうしたらよいのだらうと憂慮している米国の父親の一人でありました。

まもなくニューヨークにつき、タクシーを拾つて親戚の家に落つきました。マンハッタンの島の土は、コンクリートで固められた高層建築で占拠され、いわゆる住宅風の建築物はたつた一軒だそうです。4日間のニューヨーク滞在は、病める大都会、アメリカ文化の毒々しいあだ花、を自から体験するに充分でありました。「親切に街頭で話しかけてくるやつに注意しろ」「街路上で財布だすな」、「金は内ポケットに入れて、上から安全ピンをかけろ」、「日が暮れたら公園に入るな」これが旅行者に与えられるニューヨーク滞滞の注意です。アパートの隣室に誰がいるかも、知らうともしない。うつかり交際すると損をする。ロックフェラービルの頂上から見下したニューヨークは、まさに白く塗らる墓の墓地でありました。

大都市と文明とは、やゝて人間の魂をすりへらし、慾望とドルのためにのみ動く尾の如き人間の群を出現させつつあります。一晩中ラッシュアワーのように自動車の洪水であるタイムスクロアー。地下鉄の轟音を子守唄にして育つニューヨーク子。三日に一度、市内のどこかで爆発する時限爆弾。この中で、市民達は出来るだけ他人との接触をさせて、自分達だけの幸福をアパートの一室の中に守つて生活しているのです。

(この項つづく)(公衆衛生院)